

男性／男性性研究はどこに向かうのか？ —研究動向と展望—

小 口 藍 子*

Where is Men and Masculinity Studies heading for?: A Theoretical Overview

OGUCHI Aiko

Abstract

Men and masculinity studies (MMS) has been spread mainly in Europe, the United States and Australia since the 1970s. In Japan, MMS broadened in the 1990s. However, much less work has been done on theoretical and empirical examination of men and masculinity. It is pointed out that there are separations between MMS and other gender/sexuality studies in terms of both theory and practice. By reviewing its trends, this article aims to present future directions of theoretical perspectives in MMS. The following findings are revealed. MMS has an adherence to social-structural and modernist frameworks, but recent years have seen challenges to this tendency which hardly questions fixed categorizing of men and masculinity. Future research on MMS theorizing needs to be done by critically reconsidering what is taken granted for in concepts of men and masculinity. To conclude, I present three ways to work on this issue. First, it is necessary to rely on poststructural feminism in theorizing men and masculinity. Second, while exploring poststructural accounts, it is also important to find out how to use effectively past frameworks, not reject them all. Third, we need to adopt phenomenology and new materialism into MMS to grasp lived experiences and materiality.

Keywords : men and masculinity studies, poststructuralism, feminism, R. W. Connell, agency

1 序論

男性／男性性研究 (men and masculinity studies)¹は第二波フェミニズムを受けて誕生し、アメリカ、オーストラリア、北欧諸国を中心に展開された研究分野である。日本においては、1980年代終わり頃から着手され始めた。ジェンダー構造に起因する問題の分析と解決のためには、女性の被抑圧や不可視化を明らかにすると同時に、これまで普遍・標準的な人間 (Human) とみなされてきた男性 (Man) を「ジェンダー化される存在」として相対化する男性／男性性研究の作業もまた重要である。その本来の目的とは、男性による女性の支配を含む社会におけるジェンダー関係を男性性の視点から分析すること (川口 2014: 73) にある。

しかしながらジェンダー研究分野において、男性／男性性を対象とした研究の蓄積は十分ではない。男性／男性性研究と他のジェンダー／セクシュアリティ研究との間に理論的および実践的乖離が存在することは、既に Beasley (2012) や Waling (2019) などによって指摘されている。欧米圏の理論を中心的に援用してきた日本の

キーワード：男性／男性性研究、ポスト構造主義、フェミニズム、レイウイン・コンネル、エージェンシー

*令和4年度生 ジェンダー学際研究専攻

男性／男性性研究についても、同様のことが指摘できるだろう。田中（2009: 13）は日本では男性学の理論研究が圧倒的に不足していると述べたが、2022年現在も状況が大きく変わっているとは言い難い。そこで本論は、男性／男性性研究のこれまでの研究動向、理論的系譜を明らかにした上で日本における研究の現状を把握し、今後の研究の理論的発展の有効な方向性を提示する。

2 男性／男性性研究の誕生と歴史の変遷

2.1 第二波フェミニズムと男性／男性性研究

20世紀のフェミニズムは生物学的性差に対する「社会構築物としてのジェンダー」を重要な概念とし、その諸理念は、人間の合理性として威信を付与され続け、かつ、経済や科学の普遍的な基盤として当然視されてきた男性性を、一つの社会的構築物として可視化させた（Gardiner 2005: 45）。男性／男性性研究は、フェミニズム理論による男性性の発見と、男性支配的な社会構造への批判を受けて誕生した。ゆえにその歴史は、フェミニズム理論の影響を抜きにして語ることはできない。本節では男性／男性性研究の歴史を、フェミニズムとの関係を念頭に概観していく。

男性／男性性研究の誕生の明確な契機となったのは、ラディカル・フェミニズムを主流とする第二波フェミニズムの男性／男性性批判である。ラディカル・フェミニズムは家父長制や男性支配構造そのものを批判的に検討し、男女二元論に基づく性支配を分析の主眼に置いた。つまりラディカル・フェミニズム理論は性差別的な事象に反対するだけでなく、男性性やそれを価値づける認識の枠組みに挑戦するものであった。フェミニズム理論の構築を受け米国では、今日のthe National Organization for Men Against Sexism (NOMAS)の前身を含む、複数の反性差別男性運動グループが誕生した。こうした運動が、男性／男性性を対象とした研究分野を生み出す礎となった（Gardiner 2005；NOMAS 2022）。第二波フェミニズムは男性／男性性の批判を顕在化させ、男性による親フェミニズム的な運動や研究の萌芽をもたらしたのだと言えよう。

2.2 第三波フェミニズムの影響

1980年代に起きたフェミニズムの重要な理論転換は、ブラック・フェミニズムを中心に提唱された交差性を前提とするジェンダーに留まらない権力関係の分析への移行であった。ブラック・フェミニズムやマルクス主義フェミニズムは、国籍、エスニシティ、階級、人種化されたアイデンティティ、セクシュアリティといった他の社会的要因とジェンダーとの相互関係性を強調した（Gardiner 2005: 42）。こうした第三波フェミニズムの潮流は、男性／男性性をめぐる議論にも波及した。「人種化された男性」への注目が高まり、アフリカ系やラテンアメリカ系の男性／男性性を対象とした研究が着手された。

また、同時代から1990年代にかけて、ポスト構造主義の影響を受けたクィア理論が展開され、フェミニズムにおける異性愛中心主義が批判的に検討された。Butler（1990=2018）を代表的な論者として、固定的なものみなされていたジェンダーの流動性や行為遂行性が明らかにされ、それは男性性の議論にも波及した。Halberstam（1998）は、「女性身体」において実践される男性性を論じた。Sedgwick（1995）も、女性性と男性性は同一線上の対極に布置されるものではなく交差的なものであり、相互依存的で可変的なものであるとした。またSedgwick（1985=2001）はイギリス文学の分析を通して、ホモフォビアとミソジニーを前提とした男性同士の非-性的で政治的な絆を表すホモソーシャリティ概念を見出してもおり、これは今日の男性／男性性研究、ひいてはジェンダー研究において依拠される重要な概念のひとつとなっている。

こうした潮流を背景に、今日の男性／男性性研究において中心的な位置を占め続ける、オーストラリアの社会学者R.W.Connellによる男性性理論が提唱された。

2.3 Connell理論の誕生と波及

ここでは、Connellによる男性性理論の誕生とその影響を確認する。1980年代後半から展開されたConnell理論には、同時代に展開されていた異性愛主義の相対化、ポスト構造主義的なクィア理論が少なからず反映されている。Connell自身もゲイ解放運動に影響を受けていることを明言しており（Connell 2005: vii）、女性に経験され

る男性性の重要性をも指摘する (Connell 2005: 230)。しかしながらその理論の基盤には、ポスト構造主義が着目する言説や象徴よりも、家長長制支配を問題化した第二波ラディカル・フェミニズム、物質的不平等を重視するマルクス主義フェミニズムの存在が強く意識されている。Connell (2005: xix) は、ポストモダニズムの言説分析では経済的な不平等などの物質的な側面を捉えることができないことを危惧する。ジェンダー関係は、非言説的な活動を通して構成される (Connell & Messerschmidt 2005: 842)。こうしたConnell理論の社会的位置性は、その後の男性／男性性研究をめぐる理論的系譜を大きく特徴づけることとなった。Connell理論は、異性愛主義や人種、階級などの社会的条件によって構成される、複数の男性性の相互関係による男性支配構造の分析枠組みを提示した。そのひとつの集大成である*Masculinities*初版が1995年にオーストラリア、イギリス、アメリカで出版されると大きな反響を生み、翌年以降スウェーデン、イタリア、ドイツ、スペイン、中国等で翻訳が刊行された。日本においても、同書第2版の翻訳が2022年5月に刊行された。

Connell理論は、男性性の地域・階級的多様性や変容がいかに「周縁および半周縁」からの「中心」支配への同意調達に組み込まれているかという議論を可能にするもの (海妻2019a: 97) として、欧米諸国を中心に受け入れられた。そしてそれは2000年初頭からの親フェミニズム的な「批判的に／男性について／明確にジェンダー化された存在として／別々におこなうにせよ共同するにせよ、男女 (双方) によって」 (Hearn 2004: 51; 海妻2019a: 97) 行われる「批判的男性／男性性研究 (Critical Studies on Men and Masculinities)」の発展を大きく促した。Connell理論は数々の批評と応答を踏まえながらも、男性／男性性研究において最も依拠される理論であり続けている。

3 男性／男性性研究の理論的系譜 (1)

3.1 「弱いモダニズム」への偏向

ここでは、Connell理論に強く依拠して展開されてきた男性／男性性研究の理論的特徴、それを巡る議論の動向を検討する。先述のようにConnell理論は、批判的男性／男性性研究 (以降CSMMと表記) の進展を促した。CSMMは、親フェミニズム的立場から男性／男性性を批判的に検討してきた。しかし重要なのは、CSMMはフェミニズム理論の立場からの批判を受けているということである。本節では、その主要な論客のChris Beasleyによる一連のCSMMの批評を概観し、男性／男性性研究の理論的特徴を把握する。

BeasleyによるCSMM批判の最も重要な点は、CSMMが「男性」カテゴリーを固定化し、自明視しているという点である。Beasley (2015a: 572) は、多くの男性／男性性研究は未だにジェンダーアイデンティティに主眼を置いているように見えると指摘する。Connellの概念や用語は「弱いモダニズム」、つまり社会構築主義的枠組みにあり、多くのCSMM理論は他のジェンダー／セクシュアリティ研究において強く依拠されるポストモダニズム批評と距離を置く (Beasley 2012: 750)。モダニズム理論下のアイデンティティの一貫性 (being) によって、Connellはジェンダーアイデンティティを凡そ安定したプラットフォームであるとみなしている (Beasley 2012: 755)。

しかし「弱いモダニズム」という言葉が指すように、Connell理論やそれを前提とするCSMMは、必ずしも「男性」カテゴリーを自明視した決定論に陥っていたわけではない。実際に、Connellの男性と男性性とを分けたカテゴリー分析は、内側で統一されたジェンダーアイデンティティや主体を拒絶し、主体を超えた、そして主体中の流動性の注目へとある程度移行するものであった (Beasley 2015a: 571)。しかし2.3で述べたように、Connellはポストモダニズム的な言説分析には懐疑的であった。そのため、Connell理論やそれに基づくCSMMは、固定化されたジェンダーカテゴリー自体に挑戦するものではなく、結果的にシスジェンダー男性による男性性の実践に主眼を置くものであった。「男性」カテゴリーをある程度自明視した上で行われるCSMMは、暴力性や抑圧性を本質主義的な「男性」に一義的に帰す危険性を持つ。それは人種主義や植民地主義の歴史を後景化させることになり (Beasley 2015a: 574)、交差性 (intersectionality) を踏まえた分析にも失敗することを意味する。4.2でも触れるが、これまでの男性／男性性研究において交差性に基づく分析が積極的になされてこなかったことには、こうした理論的な前提も影響していると考えられよう。

ただしBeasleyはCSMMによる「男性」カテゴリーの使用を闇雲に批判していたわけではないことも、併せて確認しておきたい。Beasley (2020) によれば、二元的なジェンダーカテゴリーを戦略的に用いることが、そこ

に潜む権力関係を露呈させるのに効果的な場合、その語用は理論と実践の双方において有効に機能し得る。

Connell理論に基づいて展開されたCSMMは社会構築主義的理論枠組みにあり、男性／男性性のある程度固定的で自明なものとなってきた。こうした理論的特徴は、ポスト構造主義に依拠するジェンダー研究との間に乖離を生み出していることが、フェミニズム理論の立場から指摘された。続く3.2では、社会構築主義的枠組みに基づいた男性性理論の展開、そしてそこで発見された限界を確認する。

3.2 新しい男性性の探求

フェミニズムに応答して誕生した男性／男性性研究では、より平等なジェンダー関係のために男性／男性性はどうに変化し得るか、という問題設定が多くなされている。その主要な議論と運動の方向性は、ジェンダー平等に向けた「新しい男性性 (new masculinity)」の追求である。本節では「新しい男性性」の理論ならびに実践的な追求の過程、およびその課題を確認する。

ジェンダー平等を希求する文脈では、しばしば新しい男性性の模索が行われてきた。Flood (2005: 460) によれば、男性による反暴力のグループや組織は、暴力によって促進、維持される家父長的な権力関係に挑戦し、非暴力とジェンダーの正義を培うようなオルタナティブな男性性の構築を推進する。男性の参与する反暴力のプロジェクトは、ジェンダーアイデンティティやジェンダー関係を日常で再構築するための重要な場である (Flood 2005: 463)。同様にPease (2014: 18) も、親フェミニズム的な男性運動においては男性のアイデンティティを不安定化しながら、女性やゲイ男性との差異の尊重を基盤にした連帯を促進する必要があるとする。

このように親フェミニズム的な男性運動においては、アイデンティティ、規範や行動原理としての男性性を、より平等なモデルへと変化させていくことが提唱される。ただしそれは、女性やゲイ男性との「差異」によるアイデンティティを前提としたものであることが窺える。また、Pease (2014) の次の記述からは、男性と権力が強く関連づけられていることがわかる。男性にとっての課題は誰も抑圧することなく権力を行使する方法を見つけることであり、伝統的でない形によって男性が力強さを感じられるように権力を再定義する必要がある (Pease 2014: 30)。男性変革の文脈での新しい男性性は、既存の男性性概念がもたらす差異や権力といった特性のある程度自明視した上で、それをジェンダー平等へと適合する形に変容していこうとするものであると読み取れる。

またその文脈においては、異性愛主義が強く意識されることも付言しておきたい。Flood (2005: 463) は、男性の反暴力への努力においては女性とのパートナーシップが中心的であると述べる。Pease (2014: 31) も、ジェンダー平等にとっては女性との親密な関係での男性によるケアや感情のこもった活動が重要だと主張する。

このようなジェンダー平等に向けた新しい男性性の希求について、近年ではその理論および実践的課題が指摘されている。McDonald (2018: 65) によれば、新しい男性性を希求する理論は、それが家父長的なものとは異なっていたとしても、ある男性性の理念を優越させ続けている点で問題がある。新しい形の男性性は、それがどんなに好ましいものであったとしても、男性にあるべき姿を命令するという制約を内包し、かつ様々な社会的関係や文脈における違いを考慮しきれない (McDonald 2018: 65)。

Harrington (2020) も、近年のフェミニズム運動において性差別的な男性の在り方を指す際に使われる「有害な男性性 (toxic masculinity)」概念を批判的に捉え、男性性の序列化について警鐘を鳴らす。「有害な男性性」は、男性に内在する男性性に責任を負わせ、それを特定の男性に押し付けることで問題を個人化してしまう (Harrington 2020: 6)。Harrington (2020) は、特定の男性性を下位に位置づけることや、それに伴って起き得る別の男性性の称揚が、男性支配構造を正統化し得ることを指摘した。

このように固定的な規範としての「新しい男性性」は、既存の男性アイデンティティを脱構築しようとするものであったとしても、目指すべき男性像として優越化される限り、男性性のヒエラルキーを再編成する機能を持つ。こうした理論および実践での課題が、男性性を固定的なものではなく、その流動性に着目するようなポスト構造主義的枠組みの応用可能性の議論を活性化させる一因になったと考察できよう。

4 男性／男性性研究の理論的系譜（2）

4.1 エージェンシーを取り戻す：ポスト構造主義、現象学、新しい唯物論

これまで述べてきたように、既存の社会構築主義に依拠する理論枠組みが、男性／男性性を固定的なもの、自明なものとして捉えていることが問題視されるようになった。そこでは、男性性を男性の行動の決定要因とするのではなく、主体化される男性のエージェンシーをどのように捉えるかが模索されていく。こうした議論が前面化するのは2010年代半ば以降である。しかしそれに先んじて、男性／男性性をポスト構造主義的枠組みから捉えようとする議論は、2000年代にも存在していた。

Hearn (2004) はConnell理論で最も依拠される概念である「ヘゲモニックな男性性」を批判的に検討し、男性性やジェンダー関係の言説的な側面と物質的な側面の双方に着目することを主張した。ヘゲモニックな男性性とは、ジェンダー関係の中で最も文化的に優位とされ、家父長制を正統化し男性による支配と女性の従属を保障するような男性性の実践の配置 (Connell 2005: 77) である。Hearn (2004) は、ヘゲモニックな男性性は実証的に定義づけるのが困難だとし、それに代わる概念として「男性ヘゲモニー (the hegemony of men)」概念を提唱する。「男性ヘゲモニー」は、男性がジェンダー関係における社会的なカテゴリーであることと、社会实践における支配的な集合的かつ個人的なエージェントであることの双方の複雑性に取り組もうとするものである (Hearn 2004: 59)。つまりこれは男性性概念が男性の行動原理をしばしば一義的に男性アイデンティティに帰してきたことを克服し、主体化される男性のエージェンシーを拾い上げようとするものとして理解できる。

Brickell (2005) もまた、ポスト構造主義フェミニズムの論者Butler (1990=2018) によるジェンダーのパフォーマンス概念を部分的に援用して、「男性」のエージェンシーを捉えようとした。Brickell (2005: 38) は、男性的な自己 (the masculine self) はパフォーマンスの中で再帰的に構成されるとする。男性性の攪乱的なパフォーマンスは、支配的または服従的なパターンを拒絶、あるいはそれに挑戦するような一連の行動を指す (Brickell 2005: 38)。Brickell (2005) の議論はポスト構造主義の理論枠組みに部分的に依拠するが、「男性」主体を固定的に見ることからはあまり逃れられてはいない。Brickell (2005: 25-6) はButlerの議論について、パフォーマンスの担い手である従属主体 (subject) が曖昧であると批判する。そのためBrickell (2005) の議論は結果的に、攪乱的なパフォーマンスの担い手としての「男性主体」の存在を前景化したものであった。しかしそれは、ポスト構造主義的枠組みを用いた男性性の議論の重要性を認識させたといえよう。

以降、男性／男性性研究におけるポスト構造主義的理論枠組みの援用をめぐる議論が活性化していく。Berggren (2014) は、男性性理論においてポスト構造主義と現象学の可能性を論じ、両者が相補的な役割を持つことを強調した。現象学はポスト構造主義による権力や言説の脱構築的な批判を取り入れる必要がある一方で、ポスト構造主義は現象学による身体性や生きられた経験の認識を必要とする (Berggren 2014: 244)。Berggren (2014) は両者のアプローチを採るために、男性性を粘着質なもの (sticky) として捉えることを提唱する。男性性は単に「男性」を位置付ける「言説」ではなく、固定的な「本物の私」という幻想、男性的な自己と、より流動的でオルタナティブな自己の間に存在する葛藤である (Berggren 2014: 246)。粘着質な男性性という概念枠組みは、確固たる「男性」の意思や行為ではなく、思いがけず発露されてしまうものとしてのエージェンシーの観点からこれを捉え直そうとする試みである。

Berggren (2014) の議論に依拠して、男性の感情的再帰性とエージェンシーを捉える男性性理論の必要性を提唱するのがWaling (2019) である。Walingによれば、男性性を男性の類型学や男性を抑圧するものとするのではなく、男性と男性性が時間や場所、主体的そして感情的な再帰的選択と交差してどのように結びついているかを考察することによって、男性の生きられた経験とジェンダーの権力関係における構造やシステムの力との複雑な関係性を掴むことができる (Waling 2019: 102)。ここでは、男性性をすでに行われた (things done) 実践の配置としてではなく行う (doing) ものとする、ポスト構造主義に即した認識枠組みの必要性が提起される。Walingは、男性性は男性にとっての決定事項ではなく、関係的なプロセスとして理解できるとする (Waling 2019: 103)。

男性性を固定的なものとしてではなく関係的な交渉のプロセスとして捉えることは、Duncanson (2015) や

McDonald (2020) によっても提唱されている。McDonald (2020: 390) によれば、「男性性はそれ自体では成り立つものではない (Masculinity never plays itself)」。McDonald (2020) は男性性の固定性を批判的に捉え、それが絶え間ない交渉によって達成されようとするイメージにしかなり得ないことを指摘した。

Garlick (2017=2019) もこれまでの男性／男性性研究の理論的境界を指摘し、ポスト構造主義理論に前向きな姿勢を提示すると同時に、ポスト構造主義が見落としがちである生の物質性を、新しい唯物論によって補完しようとする。Garlick (2017=2019) は、生や身体の複雑性に着目して議論を展開する。そこで男性性とは、補綴物ないし、生命が流動する社会自然的システムを特徴づける生態学的複雑性との関係を規制することによって特定のタイプの自己を生産し安定させようとする身体化のテクノロジーであると理解される (2017=2019: 193)。さらにGarlick (2017=2019) は、このような生や自然の複雑性、そしてその複雑性を服従させようとするテクノロジーとしてConnellの「ヘゲモニックな男性性」を捉え直そうとする。ここではGarlick (2017=2019) が社会構築主義的立場と評するBourdieu (2001=2017) による、ハビトゥス概念を用いた男性支配が自然化されるメカニズムの説明が再評価される。Bourdieu (2001=2017) の『男性支配』の議論は、これまでの男性／男性性研究ではあまり着目されてこなかった。しかし近年ではそれをConnell理論と両立させようとする試みもなされ (Hadas 2020)、その応用可能性の再検討がなされている。

このように男性／男性性研究では、これまでの社会構築主義的枠組みへの偏向の境界が認識されつつあり、それはポスト構造主義フェミニズム理論への移行を促している。併せて、言説に着目する傾向を持つポスト構造主義的理論枠組みから生の物質性や生きられた経験を捨象させないために、現象学や新しい唯物論の可能性が模索されている。しかしながら、これは社会構築主義的枠組みの消滅を意味するのではない。モダニズムとポストモダニズムは対立軸でなく同一線上にあるのであり (Beasley 2012: 749)、ConnellやBourdieuといった社会構築主義的立場にあると評される議論の有効性を引き継ぎながら、両者を慎重に節合しようとする理論的探求が進められているといえよう。

4.2 脱中心化の流れ

本節では、これまで概観したような理論的な推移と並行して、男性／男性性研究における白人・異性愛・シスジェンダー中心主義を見直す作業もなされていることを確認する。

男性／男性性研究において、これまで交差性の影響は限定的なものであった (Berggren 2013: 191; Christensen & Jensen 2020: 82)。しかしながら、ジェンダー化された権力関係を把握し説明することを目的とする男性／男性性研究にとって、交差性の議論は避けられないものである。Christensen & Jensen (2020: 85) によれば交差性概念は、人種やエスニシティ、階級、セクシュアリティが特定の男性の支配的な地位や特権の正統化に作用すること、一方で特定の男性たちが特権を得られず、または特定の形の (超) 男性性に留まる程度にまで正統性を弱められていることを説明する点で意義がある。加えてBerggren (2013: 207-8) は、特に男性／男性性研究では交差性を「複数の男性性 (masculinities)」の理解に留めず、不平等なカテゴリーが交差する「程度」を説明することが重要だと主張する。ただし、より多くの労力を費やすべきなのは不平等の是正であり、男性／男性性に対する私たちの理解がどのように既存の理論的資源から利益を得ているのかを検討することであるとする Berggren (2014: 247) の主張も、忘れてはならないだろう。

次に、異性愛的セクシュアリティの脱中心化を試みる議論を概観する。Hammaren & Johansson (2014, 2020) はSedgwick (1985=2001) のホモソーシャリティ概念の再考を行い、その認識の転換を図った。本概念は、「家父長制を維持するための男性同士の関係」という一般的語用の乱用に偏りがちである (Hammaren & Johansson: 2014: 1)。しかしながらホモソーシャリティの重要な点は、そこにクィアリーディングや、根底にある欲望と関係性の連続体を読み解く余地が多いにあるということである (Hammaren & Johansson 2014: 2)。これを踏まえ Hammaren & Johansson (2020: 217) はホモソーシャリティを、ヘゲモニーを維持するための権力の強化の手段を指す「垂直・ヒエラルキーのホモソーシャリティ」と、感情的な近さ、親密さによる利害関係を伴わない男性同士の関係を指す「水平のホモソーシャリティ」との2つに区別することを提言する。これらを区別して議論することによって、ホモソーシャリティの異なる様相を分析し、その異なる影響に焦点を当てることができる。

男性同士の関係における欲望の連続体を読み解く概念として、ホモエロティシズム (homoeroticism) の有効性も論じられている。Longstaff (2020: 225-6) によれば、ヘゲモニックな配置やイデオロギーは男性を規制し位置づけるのと同時に、ホモエロティックな欲望の発展を促すという。ホモエロティックな欲望を認識することは、シスジェンダー的男性性とセクシュアリティに規制されたパフォーマンスィヴィティによる規範的な構造を脱構築しかつ再構築する可能性を持つ (Longstaff 2020: 224)。

また異性愛的男性性の脱中心化を図る試みとして、Beasley (2015b) による「異端の異性愛的男性性 (heterodox hetero-masculinities)」も挙げられる。異端の異性愛的男性性とは、明確なクィア的な脱規範の実践に限らず、正統性の軸から何がしかの離脱の傾向をはらむ広範な男性性の在り方を捉えようとする概念である (Beasley 2015b: 136)。つまりこの概念は、「新しい男性性」の対抗的な擁立が伴わなくとも、既存の男性性には固定性を緩やかに融解へと導く素因が内在することに目を向けさせるものだと理解できる。

最後に、男性／男性性研究のシスジェンダー中心主義を批判的に問うものとして、Abelson & Kade (2020) によるトランス男性性の議論を挙げる。Abelson & Kade (2020) は、これまでの男性／男性性研究ではトランス男性やトランス男性的な人々を中心的な従属主体 (subject) として含むことがほとんどなかったことを指摘する。それを踏まえAbelson & Kade (2020) は、男性／男性性研究分野におけるトランス男性性の議論の方向性を提示する。その提言には、欧米世界に留めずに地理的視野を広げること、交差的な分析を活用すること、そして積極的にトランスジェンダー男性を男性の下位集団に含め、トランス男性を根本的にシスジェンダー男性と異なる集団とみなさないことが含まれる (Abelson & Kade 2020: 170)。これらの提言はいずれも、トランス男性性をシスジェンダー男性／男性性の下位に位置づけるのではなく、むしろシスジェンダー男性／男性性を中心化してきたこれまでの認識枠組みを脱構築するねらいがあるといえよう。

このように近年の男性／男性性研究においては、白人・異性愛・シスジェンダー主義を脱中心化するための理論的な試みが行われている。それは、本研究分野におけるポスト構造主義への理論的変遷と相まって、男性／男性性において自明とされていた知の在り方を問い直す作業であると捉えられる。こうした状況を踏まえて、続く5では日本の男性／男性性研究の動向を考察する。

5 日本の男性／男性性研究の動向

5.1 男性学の誕生、研究の蓄積

日本において男性というジェンダーへの関心の萌芽が本格的に芽生えたのは、1980年代終わりから1990年代初めにかけてであった。日本の男性学の先駆者である伊藤 (1993) は、1990年代を「男性問題」の時代と名付ける。伊藤 (1993) は男性自身が「男らしさ」の課題に向き合いそこから自由になることで、女性だけでなく男性自身もまた解放され多様な生き方が可能になるとして、「メンズリブ」を提唱した。こうした男性学の誕生には、マクロな社会経済の変遷が大きく影響している。1970年代以降の脱工業化による構造調整の影響を受けたのは男性だけではないものの、男性の稼ぎ手役割 (breadwinner) の喪失は男性／男性性の議論において主要な関心のひとつである。日本でも雇用の非正規化、終身雇用を前提とした雇用慣行の崩壊が進み、男性たちにとっても稼ぎ手役割の実現が困難になった。このような、いわば男性性の「揺らぎ」ともいえる状況と相まって、日本の男性／男性性研究が展開した。

学術的な男性／男性性研究が蓄積されたのは、主に2000年以降である。Connellの男性性理論は、多賀 (2001) や田中 (2009) などによって現代日本の研究に援用された。それ以降、日本の男性性研究においても、Connell理論が中心的な存在であり続けている。男性性の歴史の変遷や、男性のセクシュアリティや身体、暴力に関する研究もなされたが (阿部・天野・大日方編 2006; Frühstück & Walthall, eds. 2011=2013; 浅井・伊藤・村瀬編著 2001)、特にその初期において関心が高かったのは、サラリーマンの研究であった。Allison (1994)、Dasgupta (2013) など、サラリーマンの男性性に関する研究がなされた。また前述のように、日本の男性／男性性研究は、社会経済的背景の変化による男性の稼ぎ手役割の「揺らぎ」に着目する傾向を持つ。そのため男性性の「揺らぎ」における男性の意識と心理的葛藤の研究 (目黒・矢島・岡本編 2012) や、必ずしも稼ぎ手役割に収斂しないような男性像の研究 (Gill 2003; Ishii-Kuntz 2003; Roberson 2003) も積極的になされた。

このように日本の男性／男性性研究においては、「サラリーマン的男性性」やその揺らぎをめぐるイデオロギー、男性の意識や心理的葛藤が主要な関心であったといえよう。

5.2 サラリーマン的男性性をめぐる議論

5.1で述べたように、日本の男性／男性性研究においてもConnell理論が中心的に援用された。とりわけ着目されたのは、ヘゲモニックな男性性の概念であり、研究対象としてのサラリーマン男性とその「稼ぎ手役割」としての男性像であった。そのため日本の男性／男性性研究においては、日本社会のヘゲモニックな男性性は「サラリーマン的男性性」だとみなされ（川口 2014: 7; 尾崎 2018: 231）、Roberson (2003)、Taga (2005)、田中 (2009)、Dasgupta (2013) など、その響に倣う議論が展開された。

こうした「日本社会のヘゲモニックな男性性＝サラリーマン」という認識の広がり背景のひとつには、「男性学」の「当事者主義」の問題（川口2008）があると考えられている。根本的に当事者主義を重視する男性学では、それを行う研究者自身の社会的階層分布に応じて、社会的にマジョリティとされる男性像が対象として想定される傾向が強い（川口2008: 32）。その結果、日本国籍・中流階級の男性にとって身近なサラリーマン的男性性が、ヘゲモニックな男性性として措定されてしまっている。

しかし、近年ではその妥当性を再検討する議論が川口 (2014) や細谷 (2016) によって行われている。川口はサラリーマン的男性性について、「どのレベルまで人々が支持していればそれをヘゲモニックであると言えるのか、その基準がはっきりしない」（川口 2014: 70）としてその妥当性に疑問を呈する。細谷 (2016: 292) もまた、サラリーマン的男性性が実際には「理想像」であることを指摘し、こうした理想像ではなく、現実に社会で覇権（ママ）を得ている男たちのあり方に重心を置いた議論が必要だと述べる。

このように日本の男性／男性性研究では、「サラリーマン的男性性」をヘゲモニックな男性性とみなすことは一定の合意を獲得していた。しかしながら近年では、それを批判的に検討する議論も生じている。さらには「サラリーマン的男性性」を中心化するようなこれまでの研究の認識枠組みを批判的に捉え、それを相対化するような試みもなされており、5.3ではそれを概観する。

5.3 新しい男性性、脱中心化

日本の男性学もフェミニズムの影響を受けた男性変革運動の性質を持ち、そこでは「新しい男性性」の模索、希求が行われてきた。「新しい男性性」をめぐる近年の重要な議論として、本論では杉田 (2019, 2021) の論考、著作を取りあげたい。

杉田が模索するのは、あるべき男性の規範的なモデルを再創造し、暗中模索しながら、創意工夫を続けるメンズリブである（杉田 2021: 164）。杉田は交差性を前提とした議論を展開しながらも、二元的な性支配の存在を重視する。そして、多数派男性たちはいったんラディカル・フェミニズムに立ち返り、男性と女性との間に性支配という線を引き直す必要があると主張する（杉田 2021: 186-7）。性支配の作用に向き合い続けながら自己と社会を変革し続けることが、杉田の希求するラディカル・メンズリブである。

このような「新しい男性性」の追求についても、これまでの議論と同様に、それが本質的な「男性」存在を措定しているという批判がなされている。海妻 (2019b) は、メンズリブにおいて「善良なホモソーシャル」の必要性を提唱する杉田 (2019) を批判的に捉える。日本では男性運動の語りを通じた共同性構築を肯定的に捉えようとする傾向が強く、「inside-out」のような認識論的脱構築の議論が見られにくい（海妻2019b: 62）。周司 (2022: 85) もまた「男女の線引きはあくまで性差別解消の手段であって、本質主義に陥ることには賛成しません」として、杉田 (2019) のラディカル・メンズリブが本質主義に立ち返る危険性を指摘する。

ただし杉田 (2019: 107, 2021: 184) は、Butlerが『ジェンダー・トラブル』（1990=2018）でマジョリティ男性への呼びかけを幾度も行っていることを読み取っており、シスジェンダー男性を基盤にした本質主義を必ずしも自明なものとしているわけではないということも確認しておきたい。こうしたポスト構造主義的フェミニズムに由来する理論枠組みの萌芽に加えて、男性／男性性の現象学の可能性を検討する稲垣 (2019) や小手川 (2019) の論考からも、従来の枠組みを超える理論的模索が行われていることが窺える。しかしながら「メンズリブ」や「新しい男性性」を提唱することの理論的・実践的限界、その戦略的有效性については、さらなる慎重な検討が

必要とされるだろう。

また特に2010年代後半以降、サラリーマン的男性性の中心化を超え、周縁化・不可視化されてきた男性像の分析が蓄積されてきている。平山（2017）は、これまでの男性学の関心が夫や父親としての男性像であったことを批判的に捉え、親の介護を担う「息子」としての男性の分析を試みた。平山（2017）は男性学が前提としてきた「自立し自律した男性像」のフィクション性を暴き出し、稼得役割への強迫を「生きづらさ」とする男性学の言説が、既存のジェンダー秩序を維持する危険性をも指摘した。また、杉田（2016）や西井（2021）らによって、「非モテ」男性の研究も行われた。西井（2021）は「非モテ」を自認する男性たちの経験を分析し、現象としての「非モテ」の理論構築を試みた。これらの研究は男性の心理的葛藤に留まらず、マクロなジェンダー構造における女性との不平等な関係にも言及している²。

最後に、周司（2022）によるトランスジェンダー男性学の提起も、日本の研究におけるシスジェンダー主義を脱中心化する試みとして紹介したい。周司は「男性学の内部にトランス男性がいる場合があるにもかかわらず、最初から今に至るまでシスヘテロ男性しかいないだろうと決めつけているのは、従来の男性学の過ちである」（周司 2022: 94）として、必ずしもシス男性的男性性に回収されないようなトランス男性の男性性の在り方を論じた。

6 結論

男性／男性性研究はConnellによる一連の男性性理論を中心に据え、主に社会構築主義的理論枠組みを用いてきた。しかし近年、従来の理論枠組みが男性／男性性カテゴリーを固定化し、自明視してきたことへの批判的検討がなされている。そこではポスト構造主義フェミニズム、現象学、新しい唯物論を用いた男性／男性性理論の可能性が模索される。ただし従来の理論枠組みが完全に棄却されるわけではなく、その有効性は今後も検討されるだろう。日本の男性／男性性研究においても、理論と実践の双方における男性／男性性カテゴリーの自明視の問題が指摘されている。さらに男性性の分析対象がシスジェンダーで異性愛の「サラリーマン的男性性」に偏重してきたことを乗り越え、それが不可視化してきたマクロなジェンダー構造を捉え直そうとする研究も蓄積されてきている。

今後の研究では、これまで本研究分野において看過されてきた男性／男性性の自明性、ひいてはその自明性を付与してきた認識自体を問い直すような理論枠組みの構築が求められるだろう。そして理論枠組み構築の作業は、以下の3点に絞られるのではないかと考えられる。まず中心的な作業として、①ポスト構造主義フェミニズムの理論枠組みにおいて男性／男性性理論を再編・深化すること。それに並行して、②既存の社会構築主義的理論枠組みの有効性を見極めること。そして③ポスト構造主義では捨象されがちな生の物質性や生きられた経験を捉えるために現象学や新しい唯物論と男性／男性性研究の節合可能性を検討すること。より具体的な方向性としては、男性性概念にパフォーマンスティヴィティ（Butler 1990=2018）を援用し直し、男性／男性性カテゴリーを所与のものとしてではなく、それらがパフォーマンス的な実践の繰り返しによって成立されようとする様相を明らかにすることが想定される。その際には、言説だけではなく物質性（materiality）をも捉えるために、現象学や新しい唯物論の検討はもちろん、Connell理論の再評価も求められるであろう。詳細は別稿にて論じる予定であり、以上の指摘を以って、本論を結ぶこととしたい。

【註】

- 1 本稿ではこれまでの日本の男性／男性性研究の潮流に倣い、masculinity/masculinitiesの表記を「男性性」に統一した。しかしすべてを「男性性」と訳出することの妥当性については、これまで十分な議論がなされてきたとはいえない。これについては紙幅を割いてさらに慎重に検討する必要があると考えるため、別稿に譲ることとする。
- 2 平山（2020）は、こうした男性の心理的葛藤、被抑圧性に偏向する「男性学」の在り方が、男性優位のジェンダー関係を保護し、ヘゲモニックな男性性の正統化を果たし得ることをここでも指摘している。

【参考文献】

- Abelson, Miriam J. & Kade, Tristen 2020 “Trans Masculinities,” Gottzén, Lucas, Mellström, Ulf and Shefer, Tamara eds., *Routledge International Handbook of Masculinity Studies*, New York: Routledge, pp.165-173.
- 阿部恒久・天野正子・大日方純夫編 2006『男性史〈1〉男たちの近代』日本経済評論社。
- 2006『男性史〈2〉モダニズムから総力戦へ』日本経済評論社。
- 2006『男性史〈3〉「男らしさ」の現代史』日本経済評論社。
- Allison, Anne 1994 *Nightwork: Sexuality, Pleasure, and Corporate Masculinity in a Tokyo Hostess Club*, Chicago: University of Chicago Press.
- 浅井春夫・伊藤悟・村瀬幸浩編著 2001『男性セクシュアリティ形成（共同研究）：日本の男はどこから来て、どこへ行くのか』十月舎。
- Beasley, Chris 2012 “Problematizing Contemporary Men/Masculinities Theorizing: The Contribution of Raewyn Connell and Conceptual-Terminological Tensions Today,” *The British Journal of Sociology*, 63(4): 747-765.
- 2015a “Caution! Hazards Ahead: Considering the Potential Gap between Feminist Thinking and Men/Masculinities Theory and Practice,” *Journal of Sociology*, 51(3): 566-581.
- 2015b “Introduction to Special Issue of Men and Masculinities: Heterodox Hetero-Masculinities,” *Men and Masculinities*, 18(2): 135-139.
- 2020 “Feminism and Men/Masculinities Scholarship: Connections, Disjunctions, and Possibilities,” Gottzén, Lucas, Mellström, Ulf and Shefer, Tamara eds., *Routledge International Handbook of Masculinity Studies*, New York: Routledge, pp.31-40.
- Berggren, Kalle 2013 “Degrees of Intersectionality: Male Rap Artists in Sweden Negotiating Class, Race and Gender,” *Culture Unbound*, 5: 189-211.
- 2014 “Sticky Masculinity: Post-structuralism, Phenomenology and Subjectivity in Critical Studies on Men,” *Men and Masculinities*, 7(3): 231-252.
- Bourdieu, Pierre 1998 *La Domination Masculine*, Paris: Seuil (=2017 坂本さやか・坂本浩也訳『男性支配』藤原書店)。
- Brickell, Chris 2005 “Masculinities, Performativity, and Subversion: A Sociological Reappraisal,” *Men and Masculinities*, 8(1): 24-43.
- Butler, Judith 1990 *Gender Trouble: Feminism and the Subversion of Identity*, London: Routledge (=2018 竹村和子訳『ジェンダー・トラブル：フェミニズムとアイデンティティの攪乱』青土社)。
- Christensen, Ann-Dorte and Jensen, Sune Qvotrup 2020 “Intersectionality,” Gottzén, Lucas, Mellström, Ulf and Shefer, Tamara eds., *Routledge International Handbook of Masculinity Studies*, New York: Routledge, pp.82-89.
- Connell, R.W. 2005 *Masculinities*, 2nd ed., Berkeley, and Los Angeles: University of California Press.
- Connell, R.W. and Messerschmidt, James W 2005 “Hegemonic Masculinity: Rethinking the Concept,” *Gender and Society*, 19(6): 829-859.
- Dasgupta, Romit 2013 *Re-reading the Salaryman in Japan: Crafting Masculinities*, London: Routledge.
- Duncanson, Claire 2015 “Hegemonic Masculinity and the Possibility of Change in Gender Relations,” *Men and Masculinities*, 18(2): 231-248.
- Flood, Michael 2005 “Men’s Collective Struggles for Gender Justice: The Case of Antiviolence Activism,” Kimmel, Michael S, Hearn, Jeff and Connell, R.W. eds., *Handbooks of Studies on Men and Masculinities*, California: Sage Publications, pp.458-466.
- Frühstück, Sabine, and Walthall, Anne eds. 2011 *Recreating Japanese Men: Asia: Local Studies/Global Themes*, Berkeley and Los Angeles: University of California Press (=2013 長野ひろ子監訳『日本人の「男らしさ」：サムライからオタクまで「男性性」の変遷を追う』明石書店)。
- Gardiner, Judith Kegan 2005 “Men, Masculinities and Feminist Theory,” Kimmel, Michael S, Hearn, Jeff and Connell, R.W. eds., 2005, *Handbooks of Studies on Men and Masculinities*, California: Sage Publications, pp.35-50.
- Garlick, Steve 2017 “The Return of Nature: Feminism, Hegemonic Masculinities, and New Materialisms,” *Men and Masculinities*, 22(2): 380-403 (=2019 清水知子訳「自然の再来：フェミニズム、覇権的男性性、新しい唯物論」『現代思想 02 特集「男性学」の現在：〈男〉というジェンダーのゆくえ』, 青土社, pp.180-201)。
- Gill, Tom 2003 “When Pillars Evaporate: Structuring Masculinity on the Japanese Margins,” Roberson, James E and Suzuki, Nobue eds., *Men and Masculinities in Contemporary Japan: Dislocating the Salaryman Doxa*, London: Routledge, pp.144-161.
- Hadas, Mikos 2020 “Pierre Bourdieu and the Studies on Men and Masculinities,” Gottzén, Lucas, Mellström, Ulf and Shefer, Tamara eds., *Routledge International Handbook of Masculinity Studies*, New York: Routledge, pp.52-61.
- Hallberstam, J 1998 *Female Masculinity*, Durham, NC: Duke University Press.
- Hammaren, Nils and Johansson, Thomas 2014 “Homosociality: In Between Power and Intimacy,” SAGE Open <https://journals.sagepub.com/doi/pdf/10.1177/2158244013518057> (2022年9月9日最終アクセス)

- 2020 “The Transformations of Homosociality,” Gottzén, Lucas, Mellström, Ulf and Shefer, Tamara eds., *Routledge International Handbook of Masculinity Studies*, New York: Routledge, pp.213-222.
- Harrington, Carol 2020 “What Is ‘Toxic Masculinity’ and Why Does It Matter?,” *Men and Masculinities*, 24(2): 345-352.
- Hearn, Jeff 2004 “From Hegemonic Masculinity to the Hegemony of Men,” *Feminist Theory*, 5(1): 49-72.
- 平山亮 2017 『介護する息子たち：男性性の死角とケアのジェンダー分析』勁草書房。
- 2020 『『男性性による抑圧』と『男性性からの解放』で終わらない男性性研究へ』『女性学』27: 42-56.
- 細谷実 2016 『『戦後日本の覇権的男性性としてのサラリーマン的男性性』説の考察』小松富久子・村田晶子・弓削尚子編『ジェンダー研究／教育の深化のために：早稲田からの発信』彩流社, pp.279-296.
- 稲垣論 2019 「男性原則の彼岸へ：男の現象学はどこまで可能か？」『現代思想 02 特集「男性学」の現在：＜男＞というジェンダーのゆくえ』青土社, pp.202-219.
- Ishii-Kuntz, Masako 2003 “Balancing Fatherhood and Work: Emergence of Diverse Masculinities in Contemporary Japan,” Roberson, James E and Suzuki, Nobue eds., *Men and Masculinities in Contemporary Japan: Dislocating the Salaryman Doxa*, London: Routledge, pp.126-143.
- 伊藤公雄 1993 『『男らしさ』のゆくえ：男性文化の文化社会学』新曜社。
- 海妻径子 2019a 「CSMM（男性〔性〕批判研究）とフェミニズム」『現代思想 02 特集「男性学」の現在：＜男＞というジェンダーのゆくえ』青土社, pp.92-104.
- 2019b 「親フェミニズム的に聴き取り大衆的に運動する：米国・英語圏男性性研究と日本男性学の研究動向比較からみる男性性変革運動の課題」『国際ジェンダー学会誌』17: 48-67.
- 川口遼 2008 「男性学における当事者主義の批判的検討」『ジェンダー&セクシュアリティ』3: 23-41.
- 2014 「R.W.コンネルの男性性理論の批判的検討：ジェンダー構造の多元性に配慮した男性性のヘゲモニー闘争の分析へ」『一橋社会科学』6: 65-78.
- 小手川正二郎 2019 『『男性的』自己欺瞞とフェミニズム的『男らしさ』：男性性の現象学』『立命館大学人文科学研究紀要』120: 169-197.
- Longstaff, Gareth 2020 “Masculinity and Homoeroticism,” Gottzén, Lucas, Mellström, Ulf and Shefer, Tamara eds., *Routledge International Handbook of Masculinity Studies*, New York: Routledge, pp.223-232.
- McDonald, Terrance H. 2018 “Conceptualizing an Ethology of Masculinities: Do We Know What Masculinities Can Do?,” *Men and Masculinities*, 21(1): 56-71.
- 2020 “Masculinity Never Plays Itself,” Gottzén, Lucas, Mellström, Ulf and Shefer, Tamara eds., *Routledge International Handbook of Masculinity Studies*, New York: Routledge, pp.384-393.
- 目黒依子・矢島澄子・岡本英雄編 2012 『揺らぐ男性のジェンダー意識：仕事・家族・介護』新曜社。
- 西井開 2021 『『非モテ』からはじめる男性学』集英社。
- NOMAS 2022 “About Us: History,” the National Organization for Men Against Sexism <https://nomas.org/about/history/> (2022年9月8日最終アクセス)
- 尾崎俊也 2018 「男性性を理解する分析概念の探求：ヘゲモニックな男性性とサラリーマン研究を事例に」『未来共生学』5: 245-244.
- Pease, Bob 2014 “Reconstructing Masculinity or Ending Manhood?: The Potential and Limitations of Transforming Masculine Subjectivities for Gender Equality,” Carabi, Angels and Armengol, Josep M. eds., *Alternative Masculinities for a Changing World*, New York: St. Martin’s Press, pp.17-34.
- Roberson, James E 2003 “Japanese Working-Class Masculinities,” Roberson, James E and Suzuki, Nobue eds., *Men and Masculinities in Contemporary Japan: Dislocating the Salaryman Doxa*, London: Routledge, pp.126-143.
- Sedgwick, Eve K. 1985 *Between Men: English Literature and Male Homosocial Desire*. Columbia: Columbia University Press (=2001 上原早苗・亀澤美由紀訳『男同士の絆 イギリス文学とホモソーシャルな欲望』名古屋大学出版会)。
- 1995 “Gosh, Boy George, You Must Be Awfully Secure in Your Masculinity!,” Berger, Maurice, Wallis, Brian, Watson, Simon and Weems, Carrie Mae, eds., *Constructing Masculinity*, New York: Routledge, pp.11-20.
- 周司あきら 2022 『トランス男性によるトランスジェンダー男性学』大月書店。
- 杉田俊介 2016 『『非モテの品格：男にとって「弱さ」とは何か』集英社。
- 2019 「ラディカル・メンズリブのために」『現代思想 02 特集「男性学」の現在：＜男＞というジェンダーのゆくえ』青土社, pp.105-116.
- 2021 『マジョリティ男性にとってまっとうさとは何か：#MeTooに加われない男たち』集英社。
- 多賀太 2001 『男性のジェンダー形成：＜男らしさ＞の揺らぎのなかで』東洋館出版社。
- 2005 “East Asian Masculinities,” Kimmel, Michael S, Hearn, Jeff and Connell, R.W. eds., 2005, *Handbooks of Studies on Men and Masculinities*, California: Sage Publications, pp.129-140.
- 田中俊之 2009 『男性学の新展開』青弓社。

小口 男性／男性性研究はどこに向かうのか？

Waling, Andrea 2019 "Rethinking Masculinity Studies: Feminism, Masculinity, and Poststructural Accounts of Agency and Emotional Reflexivity," *Journal of Men's Studies*, 27(1): 89-107.